



医療崩壊か、 医師の偏在か

室蘭市医師会
市立室蘭総合病院 病院事業管理者
土肥 修司

新しい年、2014年で、臨床研修医制度が義務化(2004年)されてから10年の歳月を経たことになる。この間「医療崩壊」という言葉が定着し、私たちもこれを地域医療の現状を言い表すには適当な言葉として使用してきた。

1)「医療崩壊」という言葉の意味

医療者間でも、地域や立場によって「医療崩壊」という言葉の意味も、抱える問題への認識もかなり異なっている。地域の多くの大学病院では、医療の担い手である若い医師が激減したため、関連病院への医師の派遣能力が減弱した。

都市部の大病院や民間病院では、実践的な臨床教育システムの負担を感じつつも、若い医師という労働力を自在に確保できる体制が確立した。一方、地域の中核病院の医師達は、専門医療の展開を求めて都市部へ移動している。そして研修病院には、応募に呼応してくる若い医師も少ない。地域の求めている総合的な医療への医師達の関心も低い。医療崩壊という言葉にはさまざまな側面があるのである。

これらは病院の名声にも関係するが、深刻なのは北海道の地方である。「選択と集中」のために、「選択されない」ことになった悲哀が病院全体を覆っている。室蘭市の高齢化率は31%の(2012年、人口94,000人)と、札幌市は高齢化率20%(同1,914,000人)とでは医療に対する期待度も、要求度も大きく異なる。だが、少子高齢化時代の先陣を走りつつある地域自治体病院では「崩壊」という現実感も重みも大きいのである。

2) 医療崩壊の要因

過去の10年間で、患者、医師、病院そして社会という4者間の関係は大きく変容した。医療には、患者という国民、厚労省と地方行政、医師・医療従事者と、3つの構成要素がある。「患者」では自身が協働する医療への理解、「厚労省・地方行政」では国民の納得する長期展望の構築、そして「医師・医療従事者」では、信頼に足る力量(知識・技術・経験)と倫理性(行動規範)が欠かせない。どれかが崩れたら、医療は崩壊のプロセスをたどることになる。これらにまつわるマスメディアの「情報」の影響も大きい。

医療の現場ではこの間、さまざまな困難に直面した。コンビニ受診を繰り返す患者やモンスター患者の増加、特に都市部の高齢者の医療に対する高い要求と医療費の高騰、そして1999年の横浜市大病院患者取り違え事件や都立広尾病院事件などの不祥事が

発生し、病院自体の対応力の欠如と隠ぺい体質が露呈した。マスメディアからの非難が集中し、社会からの信頼を喪失し、患者の不安感が増大した。そして臨床研修医制度の必修化であった。

だが一番の要因は、経済効果を優先した国の「市場原理主義」による医療政策である。金銭志向の風潮の高まりは、自由度を増した医師達を直撃し、大都市の民間病院への移動が顕著になった。彼らの内向き志向に拍車をかけ、金銭志向に駆り立てた。金銭志向は何時の世にもあった。若い医師達への到来はむしろ遅すぎたのだが、この傾向は、大学医局という専門科医の理念と修練という籬(たが)を外され、より顕著になった。医師達の探究心が患者の治療に役に立つという理念は、医療を学ぶ彼らの中心課題ではなくなった。従って「破壊」の要因には、若い医師達が正義を失ってきたこともある、と感じている。

3)「医療崩壊」という「パラダイム」からのシフト

『北海道の医療崩壊を立て直す』には、何が必要か、私には明確な答えはない。地域医療の前線で学んだ一つは、「医療崩壊」は崩壊ではなく、「医師の偏在」であるという認識である。だが、この偏在をどう解消するかも難しい問題である。

地域医療の変化、これを「医療崩壊」というパラダイム(この時代の支配的な物の見方)としてくくるかはともかく、この傾向をシフトさせなければならぬことは確かだ。医療の展開は経済の展開とは違う。企業は収益増を求め製品コストを下げるため海外にシフトした。そして国内の物づくりの力も弱体化した。医療はどうか。わが国の発展を支えてきた人達が、今高齢者となって地域に残されている。彼らは急性期医療も、療養も、介護も必要とする。彼らの自立を促しつつ健康寿命を維持し、満足感と尊厳とをもって天寿を全うできる地域基盤を整えるのが喫緊の課題である。ここにシフトする大義がある。

大都市への人口の流出は、今に始まったことではない。医師という職業の特性でもない。医師の偏在は富の偏在を意味する。地域医療は静かに継続できればよいのだが、医師達の疲弊の前では無力を感じる。医師の負担を軽減し、高齢患者のニーズに応えるには、他の専門職と連携して力を得て、地域の身の丈に合った医療・療養・介護の包括的なセンターの構想も必要と感じている。

室蘭の地での第二の人生を始めた時、私は学生や若い医師達に、「私たちが仕事をするにあたっては、金銭より重要な価値があることを、身をもって示していかなければならない」と、感じた*。2年を経てもその気持ちは変わらない。医学部は、まだ志の高い優秀な若者を集めている。新しい年、大学や研修病院の教育の力に期待したいと思っている。

※土肥修司：医療現場の喪失感 後世につなぐ気概を再び 朝日新聞 2010年12月3日